coat.

榛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｏａｔ．

【Ｎコード】
Ｎ９４３５Ｗ

【作者名】
榛

【あらすじ】
冬になると、君を思い出す。灰色のなか、君は鮮やかだった。

私は君を、思い出す。
このコートを、着るたびに。

受験目前、受験対策の冬期講習。
きらきらと華やかにネオンが瞬き、街は連続するイベントに浮き足立つ。だけど、その時期の受験生は灰色で。煌びやかな光の中を、暗い顔で人を掻き分けて歩くんだ。輝く街が、別世界のような気さえしてくる。
なんて場違いな存在なんだろう。世間は聖なる夜や年末年始を目前に、こんなにも盛り上がっているのに。色の洪水のように、ありとあらゆる色が街中に溢れている。その中を、モノクロの受験生が横断する。それはまるで、インコの群れに間違って迷い込んだ烏のよう。
恋愛に現つを抜かしている余裕や余力なんてほとんど残っていなくて、一番の欲求は睡眠と安息。色気もへったくれもあったもんじゃない。
今回の冬は、正念場だってわかってる。けれど、あまりの灰色具合に溜息が止まらない。口から漏れた息の塊は、冬風に掻き消された。
イルミネーションを横目に顔を近付けるカップルの横を通る。その甘さに、砂、吐きそう。世間は気楽だ。呑気だ。人が受験勉強に追われて必死こいて遠い塾に通っているのに。街はお祭り騒ぎだし。カップルは場所わきまえずにイチャつくし。ちゃっかりバーゲンやってるし。

「やってらんない」
呟いた言葉は、人波に飲まれて消えた。そして私は塾に吸い込まれた。

塾に吸い込まれたのは、まだ太陽がさんさんと輝く午前中。机に齧りつき、ない頭をフル回転させ、右手が痛くなるほど使って。そうして授業が終わったのは、とっぷりと日が暮れてからだった。
講師がテキストを持って颯爽と教室を後にする。長い授業をしたあとなのに、疲れた様子もなく何故あんなに無駄に爽やかでいられるんだろう。チューターたちが配るプリントを受け取ったら、そのまま机に突っ伏してしまった。
知り合いは誰もいない。自分の学区から三十分かけて電車で通っている。知り合いがいないのなんて、当たり前だ。でも、自分のレベルを知りたかった。井の中で天狗になるよりも、悔しさをバネに勉強するほうが性に合っている。だから、わざわざ全国区で名の通っている有名塾に来た。
でも、自由時間が辛い。授業と授業の間の休み時間や、一時間とられている昼休み。一人は、時間が長く感じる。周りは普段も塾に来ている人たちらしく、チューターと喋ったり友達同士固まっている。転校生になった気分。
プリントとテキストを鞄にしまい、コートを羽織りかけて、トイレに行ってから帰ろうと思い立った。
まだ一日目だけど、たぶん顔は死んでる。授業中に精気をすべて吸い取られたかんじ。
知り合いが居なくてよかったと、ちょっとだけ思った。こんな顔、誰にも見られたくない。早く家に帰って、早く寝よう。用をたして教室に足を動かす。
あぁ、一日中座ってたから、足も浮腫んでる。一言で表すなら、最低最悪、だ。……これじゃ二言か？

「……せさん？」
足が、自然と止まる。
空耳かと思った。こんなところで好きな人の声が聞こえるなんて、重症だ。
階上のクラスも授業が終わったらしく、沢山の生徒が階段を下りている。知った顔は、ない。
……空耳か。頭、重症すぎ。そう思って、階段の前を通り過ぎた。
「山瀬さん！」
呼ばれた。今度ははっきりと聞こえた。
振り向くと、急いでいるような足音をたてて下りてくる人が見えた。間違いない。間違えようがない。
「うそ、白石くん？」
「階段下りるとき、丁度鏡に映った姿が見えてさ。すっごい偶然」
そう言って白石くんが指差した階段の踊り場には、大きな鏡があった。少し、息が荒いみたい。
心臓が、忙しなく動きだす。
「ほんとすっごい偶然。でも、鏡見てよく私だってわかったね」
「まぁね」
少しはにかむようなその表情に、胸がきゅんっと狭くなる。
鏡を見て私だと気付いてくれたのも、かなり嬉しかった。
「知り合い誰もいなくて、休み時間とか寂しかったんだよね」
「あ、私も。一人でご飯とかして、かなり孤独だったよ」
お互い、苦笑しか出ない状況だった。
こんな遠い塾に、ひとりでも知り合いがいただけで奇跡的だ。
「授業終わった？　一緒に帰ろっか」
白石くんは何でもないことのようにさらりと言ったが、私にはかなり重大だ。
好きな人と、一緒に帰れるんだから。
「え……うん」
心臓、鳴り止め。騒ぎすぎだよ。

「あ、もしかして山さん、まだ授業ある？」
「いやいや、もう頭いっぱいいっぱいですよ。って、山さんって呼ぶのやめてよ」
「えー、いいじゃん。折角僕がつけたあだ名なのに」
「芸人みたいで嫌なんだってば」
「じゃあ山ちゃん」
「リアルに芸人だし。鞄取ってくるね」
不毛な争いになりそうだから、途中でやめた。
教室に入ってコートを羽織るとき、暗い窓に映った自分を見てぐったりした。
髪の毛切ってないし。疲れ切った帰宅途中のサラリーマンみたいな顔してるし。自分で自分に幻滅だ。……いや、滅するほど自分に幻想を抱いていたわけでもないんだけど。やっぱ、多少はいい状態の時を見せたいものだし。最高に可愛い自分、は無理だけど。今の自分は最高に可愛くないし。
鞄を掴んで自分で自分にがっかりしながら、教室の外で待たせていた白石くんのところへ向かう。
「おまたせ、しろちゃん」
可愛くないなら、せめて笑顔だけでもと思った。だから、最高に頑張って笑顔を作った。
「……一応年頃の男子なんだし、ちゃん付け、やめない？」
「しろちゃんが山さんって呼ばなくなったら、考えるよ」
しろちゃんも山さんも、中一の頃のあだ名だ。
山瀬の頭文字をとって、白石くんが私に付けたのが山さん。
白石くんの頭文字をとってつけられたのが、しろちゃん。
山さんは白石くんしか呼ばない。皆、山瀬さんとか山瀬とか山ちゃんとか、その他は下の名前で呼ぶ。白石くんは名前は勿論、肌が白雪姫のように白いのも理由の一端。女子からはしろちゃん、男子からはシロと呼ばれている。まぁ、成長途中だからか知らないが、一六〇センチの私より若干高いくらいだから、可愛がられても仕様

がないだろう。
　でも、私は知ってる。実は白石くんが、小さい頃から空手をやっていることを。

　ふたりで階段を並んで降りている。その状況が、現実に思えない。心臓、いつか壊れるんじゃないだろうか。
「なんかさぁ、話すの久しぶりだよね」
「そういやそうだね。夏以来だっけ？」
「一応夏に部活卒業したんだよね、私たち」
「どうせ受験終わったら、また遊びに行くんだけどね」
「同感」
　お互い同じことを考えていた。ふたりで悪巧みをするように、こっそり笑った。
　白石くんの態度は昔と一緒でかわらない。それが、心地いい。そこが、好き。
「あー、部活行きたい。山さんもそう思わない？」
「思う。絵、おもいっきり描きたい」
　私と白石くんの接点は、二つ。
　一つは、同じ美術部に所属してること。もう一つは、一年の時同じクラスだったこと。たったそれだけ。
　でも、一年間は長い。神様の計らいか、一年の間に何度も白石くんと行動を共にする機会があった。
　その鮮やかに咲く笑顔を見るたびに。気さくな態度で接してくれるたびに。好きが積もっていった。気が付いたら、目で追っていた。好きになってた。
　階段を下り終わり、前の人に続いて自動じゃないガラス戸から出る。前の人が押さえてくれなかったから、勢い良く閉まるガラス戸をいっぱいに広げた掌で受け止める。殺しきれなかった勢いと重さに、少しよろめいた。けれど後ろから白石くんの手が伸びてきて、

重さから解放された。
細い腕なのに、私より力がある。こういうところで、やっぱ男の子なんだって思う。
「ありがと」
「いやいや。山さんさ、かわんないね」
何故か白石くんは笑いを堪えているように見えた。
「え？　何が？」
今の行動のどこが面白かったんだろう。
「アレ」
口元を手で隠しながら白石くんが指差したのは、ガラス戸。闇に沈む透明なその表面に、電灯に当たるとくっきりと手形が見えた。
「あ」
その光景に、既視感を覚える。
「思い出した？」
見た。同じ光景を、見た。白石くんと一緒に。
「う～、ちょっと待って。喉元まで出かかってるから」
同じ行動を、した。体が覚えてる。あれは確か……。
「社会見学の……」
「待って、言わないで。思い出したから」
思い出したくないことまで、思い出してしまった。顔が熱くなる。
「新聞社に行ったときだよね？」
「あたり」
そう言った白石くんは、既に肩を震わせていた。
「恥ずかしいから笑わないでよ……」
「だって、手形があんなにくっきりつくからさぁ」
ガラス戸を見ては、笑いだす。そんなにツボか？
「急に閉まるんだから、しょうがないじゃん。もう、笑わないで行こうよ」
肩を震わせる白石くんを引っ張って、駅に向かう。暗い中を暗い顔をして歩く他の塾生が、訝しげな顔で白石くんを見ている。視線

が痛い。もし自分が隣に居なかったら、確かに完全に不審者だよね。
「あー、可笑しかった。山さん、グッジョブ」
「笑いすぎですから。それより早く行かなきゃ乗り遅れるよ」
「え、もうそんな時間？」
「そんな時間」
慌てて腕時計を見る白石くんに、すまして言った。

日没の早い空は既に真っ黒で、色とりどりのイルミネーションが点滅を繰り返し、夜空を少し明るく染めている。
「三十分も駅で待ちたくないし、急ごっか」
次のに乗り損ねたら、寒い中三十分も待たなければいけない。そんなことしたら、この大事な時期に風邪引きそうだ。
駅ビルのクリスマスツリーは、首が痛くなるほど見上げなければ天辺の星が見えない。でも、今そんなものを見ている余裕はない。早歩きと小走りの間の速さで人込みを擦り抜け、改札を通過しホームに入ると同時に目当ての電車の扉が開いた。
走って乗り込んで。すぐに扉が閉まって、電車は動きだした。
「よかった、間に合った」
「ギリギリだったね」
荒い息のまま冷たい扉にもたれ、口を開いた。三十分待ち続けるのは、免れた。
《えー、ご利用いただきまして有難うございます。駆け込み乗車は大変危険ですので、ご遠慮くださいますようお願い申し上げます》
車掌がアナウンスする、鼻にかかったような声が車内に充満する。指摘されたのは、間違いなく自分たちのことで。顔を見合わせて、一瞬の沈黙の後。笑ってしまった。
「車掌に注意されるとか、ありえないね」
「だよね。遠慮してたら三十分待たなきゃいけないんだもん、これくらい見逃してくれたらいいのに」

「融通がきかない、頭かたい人なんだろうね」
暗い電車の窓に映る二人の半透明な虚像も、楽しそうに笑っている。乗客は皆疲れた顔をしていて、目を開いている人の方が少ない。
「しろちゃん、冬期講習いつまで？」
「三十日まで」
「じゃあ一緒だね」
「この一週間憂鬱だなぁ」
「本っ当だよね」
「まぁ、お互い頑張りましょーか」
「そーしましょーか」
私は、頑張ることを確認しなくても頑張れそう。だって、大好きな君が一緒なんだから。

次の日から、白石くんは昼休みになると私のところに来てくれて。塾が終わると、教室の外で待っていてくれるようになった。彼氏と彼女みたいだな、と思っちゃったりした。
思い上がりだと、わかってる。けど、辛いはずの塾が楽しみになったのは事実で。この大事な時期に浮かれてるわけじゃないけど、勉強が楽しくなったのも本当なのだ。別に推薦だからというわけではないが、必死こいて勉強しまくらなくてはいけないわけではない。だからかもしれないが、白石くんと居られるその現実が嬉しかった。
もうすぐ、昼休み。また、白石くんに逢える時間がやってくる。
「はい、じゃあ今日はここまで」
講師の一言で、教室の緊張感が一気にほぐれた。お尻の位置をずらして、だらけたように浅く座って頭を背もたれに預ける。
疲れた……。
あと二日だからか知らないが、講師の指導にはやけに熱がこもっていて、それでいて難易度も上がっている。わからないわけではないが、一問解くのに時間がかかる。それなのに講師は前と同じだけ

しか時間を与えてくれないから、頭が回転しすぎてオーバーヒートしそうだ。
頭があったかくて、ぼやっとする。使いすぎると、上手く働かなくなるみたい。
「……疲れた」
確認するように小さく口に出してみた。
うん、疲れてる。体は座ってたから固まってるし、足は浮腫んでる。若くても、疲れって溜まるんだなぁ。しみじみ、そう思った。
「山さん、お疲れ」
後ろから白石くんの声が降ってきて、私はだらけた姿勢からお尻をずらして普通の姿勢に戻る。
「しろちゃんも」
白石くんは、今日も忠犬ハチ公のようにやってきてくれた。
そのまま私の前の席に腰を下ろし、手に持っていたコンビニの白い袋を机に置く。
「疲れてますー、って顔してるね」
笑いながら少し顔を覗き込まれて、疲れているのに心臓がジャンプする。
あぁ、もう。
知られたくなくて、さり気なく見えるように片付けながら。
「そっちこそ」
顔を、逸らした。
「お互い様だよ」
「そうだね。なんか、若くっても疲れって溜まるんだなって思った」
「……山さん、感想が若くない」
「疲労困憊ですから」
実際に溜まってるんだから、仕様がないじゃん。そうは思うけど、可愛くない返事はやめておく。自然体でいたいけど、やっぱり一緒に居るとどこかしら緊張するものだ。悟られないようにするのって、意外と重労働。

膝掛けがわりにしていたコートを肩まで引き上げ、膝を折り椅子に上げて潜り込む。目を閉じたら、守られているような気分になった。
「……ご飯食べないの？」
「食べるけど……」
もう少し、このままでいたいんだ。
見えない世界では、白石くんの声がすごく間近に感じられる。本当に、すぐ近くにいるような。本人を目の前にしてやることじゃないだろうけど。狭いところって、落ち着くから。
しばらくそのままで、何となく目を開けたら、白石くんがすごい不思議そうな顔をして、パンを食べながらこっちを見てた。
「……」
「……」
たぶんずっと観察されていたんだろうと思うと、変な感じ。本人目の前にして、一体どんなプレイだ。
心の中で一人ツッコミをして、白石くんの視線を痛いほど感じながらお弁当を取り出す。
「もう気が済んだ？」
「うん、済んだ。変な光景お見せしました」
「いやいや。狭いとこ、好きなんだ？」
なんであの格好で、狭いところが好きだってわかったんだろう。
「大好き。隅っことか、囲まれてると落ち着く」
「だから体操座りするんだ」
「あ、そういう事」
「何が？」
「ううん、こっちの話」
鋭いのかな。観察することに慣れてるからかな。なんとなく私をわかってくれる。白石くんの、そういうところが、すき。特別じゃないんだないんだろうけど、でも、そういうのって嬉しい。
それからお互いに何となく無言のままで、咀嚼しては飲み下す。

周りは話し声で揺れているのに、私たちだけがとまっていた。私がまだ半分しか食べ終わってないのに、白石くんは食べ終わってしまったようだ。細い身体の中にパン二個を入れたのに、まだ物足りなさそうな顔をしている。
「白石くん、足りないの？」
「成長期の男子にパン二つじゃ足りないよ」
すごく不満そうな顔をしている。そんなものかな。
「私はパン二個で十分だけどなぁ」
「男子は燃費が悪いんだって」
クラスの昼食風景を思い出し、確かに男子はお重のようなお弁当を食べても、お腹を減らしていた。やっぱり燃費は悪い。
「確かに」
「あー、もう一つ買えばよかった」
机に突っ伏して、かなり凹んでいるようだ。
「何で買わなかったの？」
「財布と会議をした結果」
「なるほど」
確かに今までは、三つパンを食べていた。お財布が痩せたから、一緒に痩せるのかな。……食べても細いまんまで、羨ましいよ。
「……これ、いる？」
私はお弁当についていた小さな容器を、フォークと一緒に俯せの顔の横に置いた。掌ほどの容器には、今日のデザートが入っているはずだ。
「え。……いいの？」
白石くんはがばりと体を起こし、少し丸くなった目でこっちを見てる。
「白石くんには足りないかもしれないけど、ないよりはいいでしょ？」
ないよりは、を強調してみた。だって、別に白石くんのために持ってきたわけでもないし。あくまで私のお昼の一部だし、地味に私

のだと主張してみた。本当は、おかずの方がお腹にたまるだろうけど、流石にそれはちょっと……ねぇ？
「いやいや、すっごい嬉しい。でも、ほんとに食べちゃっていいの？」
嬉しさと遠慮の混ざった黒い瞳が、私を見る。
ああ、目って素直なんだな。目は口ほどにものを言うだなんて、昔の人はよく言ったものだ。
「お金なんて要求しないから」
正直な瞳に、小さく笑ってしまった。
「じゃ、遠慮なくいただきます」
白石くんはフォークを手に取り、手を合わせてから蓋を開けた。
中に入っていたのは、一面真っ白な物体。足跡のない雪原の真ん中に、ミントがちょこんと鎮座している。
「……山さん、貰っといて何なんだけど」
「……うん」
「これ……何？」
「……生クリーム？」
どう頑張っても、生クリームにしか見えない。というか、この容器全部生クリームオンリーとか？　だとしたら、どんな気違いだ私の母親は。
正体がわからないものを他人に食べさせる訳にはいかない。私はお弁当の入っていたくまの袋の中を覗く。普段見かけない珍しいものを入れる時、いつも母が注意書きのようなメモを入れているからだ。案の定、紙切れが一枚、入っていた。
取り出してみると、こう書いてあった。
『今日のデザートは、トライフルのようなティラミスのような、不思議な押し寿司風ケーキだよ』
とりあえず突っ込みたいのは。自分で作っておきながら「不思議」とか言わないでほしい。不安になるじゃん。押し寿司風ケーキって、そもそも何なんだろう。

「何が書いてあった？」
不思議そうにしている白石くんに、何も言わずに紙を渡す。黒曜石のような瞳は、文字を追って左右に揺れる。何度か目を往復させ、困惑した影を瞳に宿したまま顔を上げる。
「要するに、スポンジと生クリーム使ったケーキってこと？」
「たぶん」
ティラミスみたいなのだったら、スポンジはあまり使ってない気がするけど。というか、普通のケーキから見ると、かなり異色の存在だと思う。原材料がわかると安心したのか、白石くんはフォークを持ちなおして、真っ更な白のなかにフォークを差し込み、掬った。その手つきは、繊細な壊れ物を取り出すときより、慎重に行っているように見えた。
どうせ食べるもの、と言ってしまえばそれまで。でも、本当に、丁寧に扱っていた。……ケーキが、羨ましい、かも。
「あ、普通においしい。もっと甘くてもいいかな」
「ほんと？　白石くん甘党だっけ？」
「うん。生クリームとかチョコとか、くそ甘いの好きだよ」
「あぁ、それで去年のクリスマス会……」
思い出すのは、去年の部活のクリスマス会。女子が作ってきた生クリームたっぷりのケーキ、平気な顔で食べてたっけ。余るかもね、と作った巨大なケーキは、結局男子が食べ尽くしてしまった。
「山さん甘いの嫌い？」
「人並みに食べるけど、甘ったるいのとかは苦手。気持ち悪くなるじゃん」
「ないない。ジョッキパフェとか平気だし」
某カフェチェーン店のパフェを思い出す。ビールジョッキを容器としてできたパフェは、八割が生クリームじゃないかと思うくらいの、驚きの白さだ。
「うぇー、ありえないし」
「ありえるありえる。食べる人がいるから売ってるんだし」

「あれはある意味挑戦だよ」
大盛り系のメニューは、自分の限界への挑戦だと思う。
「そう？　女の子って、みんな甘いの大好きだと思ってた」
「男子ってみんな甘いの苦手だと思ってた」
お互いの認識のずれに、驚いた。似たような環境で生活してても、こんなに感覚は違うんだ。
喋っている間に白石くんは着実に食べていき、あと一口でおしまいというところまできた。
「早いね」
「そう？」
「うん」
ぱくり、と大きな口に吸い込まれたフォークは、薄くのびた生クリームを表面に纏って出てきた。蓋を閉め、丁寧に手を合わせた後の顔は、満足そうな顔だった。
「ごちそうさまでした」
「御粗末さまでした」
食べおわった私の弁当箱と一緒に包み、鞄の中へしまった。
「……あのさ」
「うん？」
「山さ……」
きーんこーん。
口を開いた白石くんを、秀逸なタイミングで鳴ったチャイムが邪魔をした。言い掛けたままの口で、固まってる。
「どしたの？」
「……いいや。じゃ、ね」
「？　うん」
未消化と言いたげな顔のまま、白石くんはゴミを持って教室から出ていった。
何、言い掛けたんだろ。謎に思っていると講師が入ってきて、また授業が始まった。考え事はアルファベットに沈み、ばらばらにさ

れ、いつしか姿が見えなくなった。

「お昼に言い掛けたの、何だったの？」
最寄り駅まであと二駅というところで思い出し、単刀直入に聞いてみた。
「え？」
白石くんは目を丸くしている。
覚えてたの、という驚きと。理由の見えない焦りが、瞳を揺らす。
「チャイム鳴ったときに言い掛けたこと。何だったの？」
「あぁ……。いや、えっと。美術部のみんなで初詣行きたいな、って思って」
揺れる――と言うよりも、金魚の尾の如く左右に泳ぐ瞳。
それじゃ、ばれるよ。
「毎年行ってるもんね。今回は、みんなで合格祈願かなぁ？」
でも、白石くんになら、騙されてもいいや。私を陥れるような嘘はつかないって、わかってる。信じてるよ。
「そっか、新年早々受験の話になるか……」
「え、違うの？」
白石くんは口元を隠すように手をやり、小さく唸った。
「いや、息抜きに行きたいな、と。んで、その日はみんなでご飯食べてだらだら喋りたい」
「あー、いいね。計画しよっか？」
「いいかな？　勉強の邪魔だって怒りそうなのが約一名いるけど」
眼鏡を掛けた、真面目をそのまま擬人化したらこういう人になるだろう、という性格の部員を思い出す。揺れ動く暗い窓の向こうのどこかに、その部員もいる筈だ。
「大丈夫じゃないかな。息抜きだって言えば、来るかもだし。自由参加にすればいいよ」
「あ、そっか。山さん頭いい」

そう納得されたところでタイミングよく電車はホームに滑り込み、私たちは会話を一度打ち切った。自動改札口に裏が焦茶の切符を通し、駅構内から人少ないロータリーへ出る。タクシーが一台、ぽつんとオレンジの光を出す街灯の下に停まっている。私たちも、オレンジの下にとまった。

「じゃあ、またね」

「うん、また明日」

「明日計画しようね」

「そだね。僕、一応元部長だしね」

「似非(えせ)部長だもんね」

「似非は余計だよ」

「あはは。じゃ、ばいばい」

白石くんと反対の方向を向き、一歩踏み出す。

「あっ……のさ」

白石くんの言葉が、後ろから私を掴んだ。掴んで放さない。絡めとられて、逃れられなくなる。

振り向くと、白石くんはさっきと同じ位置のままだった。

「……ごめん、なんでもない」

白石くんは、何かを言えなくて辛そうだ。

言っちゃえばいいのに。そしたら、楽になれるのに。

「……言えないなら、さ」

「え？」

「言えないなら、行動で示して？」

ね、と駄目押しのように言ってみた。

「……いい、の？」

おかしなくらい、躊躇っている。体の両脇の掌が、ぐっ、と拳を強く握ったのが見えた。

そんな、躊躇うようなことを言ったりやったりするつもりなのだろうか。

「……いい、よ？」

おもわず、返事を躊躇った。
よく考えたら、やられるの私だし。何されるのかわからないのに了承するの、怖いし。
「……じゃあ、やる」
決意したような顔で、近づいてくる。一歩一歩踏みしめるような、その足取り。
動けない。呼吸も動きも、全部真剣な表情に吸い取られたみたいに。
白石くんは、私の目の前まで来て。
「ほんとに……いいの？」
ぽつり、と呟いた。
雪のように静かに降る言葉に。口が、動かなくて。頷くことしか、出来なかった。
「じゃあ……失礼します」
緊張したその場に似付かわしくない事を言い、白石くんは両腕を広げた。
二人の間の距離を限りなく狭くするため、もう一歩近づいて。
腕の中に、私はすっぽり収まった。
白石くんのコートは薄手なのか、表面がさらりとして毛羽立っていない。
黒色が、オレンジに照らされて変な色になってる。
肌は人形のように無機質な色で、暖かみはない。
私は腕の中で、自分でも驚くほど冷静だった。頭の芯がぼんやり熱くなって、体は動くのをやめてしまったけれど。心臓は、思ったよりも静かに鼓動を続けていた。
「……山瀬……」
少しかすれた白石くんの声が、耳からじんわりと、私の体の強張りを解いていく。
ああ、私、白石くんそのものも好きだけど。白石くんの声も、好きなんだ。声が体に染み渡っていくとき、そう、思った。

私、白石くんの、存在そのものに、恋してる。全部に恋してる。
「……山瀬」
「……な、に？」
喉は緊張していたのか貼りついていて、声がうまく出なかった。
耳のすぐそばから聞こえる声に、何故か背筋がぞくりとする。
目の前の肩口に、力が入った。そう思うと同時に、私を包む腕が少し狭くなる。私は腕を背中に回すことも、嫌がることも、しなかった。ただ無抵抗に、されるがままになっていた。
白石くんの腕の中は、とても居心地がよかった。
「……山瀬、ありがと」
何度も私の姓を呼び、最後についてきたのは感謝を示す言葉。
「え……？」
さっぱり、訳がわからない。
「こういう時に、言うことじゃ……やることじゃないってわかってたのに、受け入れてくれて」
白石くんは腕をゆるめ、互いの顔が見えるようにしてくれた。こんなに近くで見たの、初めてだ。間近に見える、白石くんの少し泣きそうな笑みに、私の胸は苦しくなるほど狭くなる。
お礼言われるようなことなんて、してない。ただ、されるがままになっていただけ。
そう言いたいのに、咽で息が詰まって、口から出てこない。言わなくちゃ、伝わらないのに。けれど、言葉にできなくて、言えなくて。私は首を振るだけで、精一杯だった。
「……何で山瀬が泣きそうなの……？」
困った笑い顔をする白石くんの方が、泣きそうなのに。
私の顔も、泣きそうなのだろうか？
腕が狭められ、私たちの距離は再び、限りなくゼロになる。
「……僕、さ」
声が、近い。
「……うん」

呼吸する音も、そばで聞こえる。
頑張れば何枚もの布越しに、忙しない心搏(しんぱく)が聞こえるかもしれない。
「言うの下手だから、言えなくて」
「うん……」
「でも、受験終わるまで、待てなくて」
「……うん」
「ちゃんと言えなくて……ごめん」
「……ううん」
こんなこと思うの、おこがましいかもしれない。
けど、許してあげる。そう思った。
気持ちが通じてたという事実だけで、私は嬉しい。果報者だよ。
私はしがみつくように、でも、そっと背中に手を回した。
私たちはしばらくそうやっていた。
触れたところから布越しに、ゆっくりと体温が伝っていく。そして真ん中でぶつかって、混ざっていく。それがとても心地よかった。
その温かさがすごく安心できることを、初めて知った。
白石くんは一度腕に強く力を入れてから、おそるおそるといったかんじで腕を放した。放されて、今一度互いの顔を見ると、何故だか恥ずかしくて。白石くんの頬にうっすら赤みがさしたように見えたし、私の頬も熱くなったからきっと赤いはずだ。
地元、しかも誰が見ているか分からない駅の前で、意外に大胆なことをしていたみたい。……と、今更ながらに思った。
「……帰ろっか」
首に手を当てながら、少しだけ目線は私から逸らされていて。
「……うん」
それを私は視界の端に、捉えていた。
私たちは反対方向なのでその場で別れ、帰路についた。
一度、振り返った。白石くんの背中が、制服の時と違っていた。

遠くから見えた玄関の小さな明かりに、少しだけ泣きたいような気持ちになった。
家に着いて、インターホンを押して、鍵を開けてもらって中に入る。いつも行っている動作というのは、頭が意識しなくても反射のように勝手に体が動く。ただいま、と挨拶をし、階段を上って自室の扉の中に入ってしまえば、私は簡単に一人になれた。
鞄を椅子に置き、コートを脱いで抱き締めた。顔を埋(うず)めると、私の匂いとは違う、匂いがした。香水でもない、シャンプーやボディーソープでもない、人間っぽい匂い。でも、柑橘類のような香りがほんの少しだけした。
そのままベッドに倒れ、コートに顔を押しあてて、ゆっくり空気を吸う。自分が吸える限界まで肺を膨らませた。
目を閉じ、ベッドの上で丸くなる。
少し軋むスプリングの音の中、私は限りなくひとりで、白石くんが近くて遠かった。
白石くんの泣きそうな笑みを思い出し、私は意識と繋いだ手を放した。

あれから、何年経っただろう。
クリーニングの柔らかく薄いビニールのかけられたコートを眺め、独りぼんやり考える。
私たちはそのまま同じ道を歩むことなく、中学を卒業した。互いの気持ちについて何も言わなかったし、互いに聞くこともなかった。ただ、卒業式にくれたボタンは、今も大事に持っている。
でも、それだけ。関わりはそれが最後で、途切れてしまった。
制服はタンスの奥深くでいつしか肥やしになり、アルバムは引き出しにしまわれたまま。白石くんを思い出すことは、なくなりかけていた。

けれど、冬が来ると思い出す。
白石くんが抱き締めてくれたときの、このコート。未だに、捨てられないままなんだ。フードの縁のファーはバサバサになり、何度もクリーニングに出したからか昔の柔らかさは片鱗さえもない。表面は、少し色褪せた。
けれど、捨てなかった。
これを見ると、君を思い出すんだ。
大好きだった人。想いが通じ合った人。君のことが、私は大好きでした。

また、冬が来る。灰色の季節が。
君の笑顔が、今も私の心に鮮やかに残ってる。

冬に、コートを出す。
君の残り香は消えてしまったけれど。
このコートを見ると、思い出す。
灰色の季節のなかで。
君が、鮮やかだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9435w/

coat.

2011年11月1日03時11分発行